

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 柳沢 史明

本論文は、概念としての「ニグロ芸術」が主として二〇世紀フランス文化圏において形成され変容する過程を思想史的に解明する論文である。

第一部は本論文全体の序を構成する。著者が「プリミティブ・アート」ではなく「ニグロ芸術」という呼称と概念を主題とするのは、後者が、西洋出自の「ニグロ」という蔑称を受け止め、それを担い、西洋的な言説にあえて参画しようとする主体の存在を可能的に含むからである(第一章)。その上で、「ニグロ芸術」は、西洋文明がアフリカの器物を「芸術」として管理する事態と、逆に「ニグロ」自身が西洋出自の「ニグロ芸術」に応答して自ら「ニグロ芸術」を実践する事態とからなる双方向的なものとして捉えられなくてはならない、と著者は主張する(第二章)。

第二部は主として西洋が「ニグロ芸術」という概念を形成した過程を扱う。第三章は「ニグロ芸術」の最大のプロモーターであった美術商ポール・ギョームの検討に、第四章はギョームの「ニグロ芸術」観の前提ともなっているゴビノーの人種理論を美術史的な「ニグロ芸術」論へと昇華させた美術史家エリー・フォールの検討に充てられ、両者が共に「ニグロ芸術」を古きもの、消えゆくものと見なしていたことを示す。これに対し、第五章は植民地行政に携わったジョルジュ・アルディが植民地化による「ニグロ芸術」の刷新を目指していたことに光を当て、また第六章は、こうした刷新によって生み出された「ニグロ画家」のカリファラ・シディベの画業に着目する。ちなみに、第六章はシディベに関する世界初の研究でもある。

第三部は「ニグロ」の側による「ニグロ芸術」への応答の過程を論じる。「ニグロ芸術」が「ニグロ」自身によって積極的に語られたのはまずはアメリカ合衆国であった。それゆえ、第七章はアメリカの「ハーレム・ルネサンス」と呼ばれる文化運動において「ニグロ芸術」の果たした役割を論じ、第八章はアメリカの「ハーレム・ルネサンス」がフランス在住の「黒人知識人」の内に移入される過程を主題とする。第九章、第一〇章は「ネグリチュード」運動の中心的人物であり「ニグロ芸術」を雄弁に語ったレオポール・セダール・サンゴールを取り上げ、彼の文化観が人種主義的・本質主義的であることを、サンゴールの批判者フランツ・ファノンとの対比の内に明らかにするとともに、サンゴールが「ニグロ芸術」という概念を「戦いの武器」として用いていたことに一定の歴史的評価を与える。

概念としての「ニグロ芸術」の形成と変容を思想史的に解明する本論文は、モノとしての「ニグロ芸術」を対象としてきた従来の美術史的ないし民族誌的研究の看過してきた側面に光を当てる点で意欲的であり、著者のすぐれた力量を示している。さまざまな言説の整理が多少図式的に過ぎるとはいえ、そのことを通して「ニグロ芸術」をめぐる膨大な資料に一定の道筋を与えられたことは大いに評価すべきである。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。